

文学部 生活科学部 看護学部 経営学部 小論文

(解答はすべて解答用紙に記入すること)

次の文章は、鷲田清一氏の「減らすのはむずかしい」と題する随想です。この文章を読み、あとの設問に答えなさい。

肝臓疾患の専門医をしておられる方のお話を聞く機会があった。医師いわく、日本人は栄養に強く、過栄養に弱い。どうということかというとき、日本人の身体は体内にとり入れた少ない脂肪を数日間うまく使って飢えをしのぐのには向いているが、栄養過多に対して脂肪を減らす機能がないということらしい。だからこのところ、肝脂肪が原因で肝臓ガンになるひとがじわりじわり増えているという。

減らすというのはほんとうにむずかしい。ご馳走があるのに、途中でやめるといのはむずかしい。便利な物をあえて使わないというのもむずかしい。なにかある事業を立ち上げるために別の事業をやめるといのもむずかしい。「足るを知る」。言葉はやさしいが、それを実行するのはむずかしい。

栄養過多と並んでそこから抜け出すのがむずかしいのが、情報過多である。情報過多になると、発信側は、それを受けとってもらうためにますます刺激のきつい衣裳を着せて情報を送る。刺激のきつい情報にふれると、ついそちらに意識はなびく。あつちにふらふら、こつちにふらふら。そのうち、今日の茶の間のように、一日中テレビをつけっぱなしということになる。テレビの前からなかなか離れられなくなる。テレビを消すタイミングを見つけないくなる。

情報をシャワーのように浴びているうち、情報は向こうからやってくるものと、勝手に思い込むようになる。そう、情報に対してどんどん受け身になってゆく。表面的な刺激の強い情報に引きずられて、情報に対して他の人と同じように感応し、同じように動くことになる。いまだきの選挙は、ほとんどそういう次元で得票が決まる。情報を内でいちどじっくり反芻する間もなく、即刻、イメージの次元で反応する。

思考のため、がなくなつたということなのだろうか。あるいは、かつて寺山修司が言っていたように、わたしたちがいま失いかけているのは「話しあい」などではなく「黙りあい」だということなのだろうか。

ほっとする話を聞いたことがある。ある銀行の幹部から聞いた話だ。銀行の営業部員というのは、ふつう想像されているのとは逆で、口八丁手八丁、上手に話すひとより、口下手で、ときれとぎれに、ぼつりぼつりと、まるでじぶんになにか言い聞かせるようにたどたどしく話すひとのほうが、断然成績がいいのである。それもそういうふうに演じるのではなく、そんな器用なことではできずに、そしてじぶんが嘘くさい言葉、浮ついた言葉を口にしましたとたん口ごもってしまう、そんなほんとうに口下手なひとのほうが、話し上手よりもはるかに成績がいいのである。

スケートリンクの上を走っているような淀みない語りよりも、とつとつとした語り、ときれとぎれの語り、躓いたり転んだりする語りのほうが、ひっかかりがあり、また空白のあるぶん、聴くほうの想像力がうごめきだすきっかけが生まれやすいということだろうか。そのほうが、受け身で聴くだけでなく、もうちょっと聴いてみようという気にはなる。

この点で、豊かさとは危ういものである。物流や情報の豊かさはひとを受け身にするからである。ひとを、サービスを受ける顧客にしてしまうからである。顧客にはみない顔をする。いい面ばかり見ていると、ますます相手にまかせられるばかりになって、かんとんにだまされる。情報を少し受けとつたら、しばらく内にため込んで、すぐに味が落ちるか落ちないか反芻してみる。そんなためを小さくつくるだけで、世界の見え方が変わってくる。テレビはできるだけこまめに切ること、テレビ好きのわたしは日頃よりそう心がけている。

(鷲田清一著『大事なものは見えにくい』より)

設問一 筆者は、情報過多の現代社会において、情報に対し、どのように関わればよいと述べていますか。筆者の主張が最も端的に述べられている一文を50字以内で抜き書きしなさい。

設問二 あなたは茨城キリスト教大学での学びにおいて、情報をどのように得て、どのように学びに活かしたいと考えますか。筆者の主張を踏まえ、800字以内で具体的に述べなさい。